

子どもと女性の健康相談室

③



福島医大ふくしま子ども・女性医療支援センター
高橋 俊文氏

女性は三十五歳以降になると、妊娠率が低下するだけでなく流産率が増加します。これは、母体の加齢により卵子の質が低下すること、すなわち「卵子の老化」が原因とされています。卵子の老化のメカニズムは不明な点が多く、現在のところ有効な治療法や予防法がありません。従って、出産年齢には適齢期があることを女性の皆さんが理解しておくことが大切です。

五〜三十九歳では50%、四十〜四十五歳では5%に低下します。不妊症治療を行った場合、この増加とともに著しく低下していることがわかります。これは、加齢による自然流産の増加が大きな原因です。自然流産率は、三十五歳以前では15%ですが、三十五歳を超える20%を超え、四十歳以上では50%以上になります。加齢に伴う自然流産の多くは卵子の染色体異常によることが知られて

います。卵子の数は出生時に二百万個ありますが、排卵が起こり始める思春期頃には三十万個まで減少します。三十七歳で二万五千個、五十歳で千個以下となり卵巣機能が停止し閉経を迎えます。女性が生涯にわたり排卵する卵

35歳以降流産率増加

妊娠のしやすさは二十〜二十四歳がピークであり、この年齢層を100%とすると、二十五〜二十九歳では90%、三十三〜三十四歳では80%、三十五歳以下では21%であるのに対して、三十五歳以上の多くは卵子の染色体異常によることが知られて

合でも、その治療成績は女性の加齢により低下します。わが国の体外受精治療のデータでは、一回あたりの出産率は、三十三歳以下では21%であるのに対して、三十五歳以上の多くは卵子の染色体異常によることが知られて

三十五歳前に作られたものですが、精子はどの年齢の男性でも約七十日前に作られたものです。昨年、日本産科婦人科学会は、女性の晩婚化やその他の理由により女性の妊娠する年齢が上昇している背景から、不妊症の定義を二年間の不妊期間から一年間に変更しました。お子さんの希望があるカップルは一年間不妊の場合には医療機関を受診してください。特に三十五歳以上の女性は六カ月を過ぎても妊娠しない場合や月経異常、子宮筋腫、子宮内膜症、その他婦人科疾患の既往がある場合は、すぐに医療機関を受診して検査と治療を受けてください。

次回回は7月18日掲載
ふくしま子ども・女性医療支援センター
<http://www.fmu.ac.jp/home/fmccw/>